

高山の町家の特徴

高山の町家は、高山祭の屋台と同様に、京都や江戸の文化の影響を受けている。江戸時代（1603-1867）、京都は御所があり、文化の中心地であったため、高山の大工たちは高山の町並みを作る際に京都の建築を参考にした。1695年に徳川幕府が高山を直轄地としてからは、高山の建築は幕府の所在地である江戸のトレンドからの影響が顕著になった。

高山の町家は、これらの文化的影響と風土への対応が融合したものである。高山の冬は雪が多いため、2階の窓の前に雪が積もらないように、住宅の上層部の屋根は下層部の屋根よりも長く伸びている。軒先には溝があり、雪解け水を集めて排水している。高山の町家は、京都や江戸の町家と違って瓦屋根がほとんどなく、ほとんどが板葺と呼ばれる木製の板で覆われていたが、現在は鉄板で覆われている。

木造建築物が密集していた江戸時代の町は、火災で大きな被害を受けることが多かった。江戸では1657年に起きた「明暦の大火」で江戸の市域の6～7割が焼失し、10万人以上の死者を出した。徳川幕府は江戸復興のための木材の供給源として、飛騨藩の山林に目をつけた。そして、38年後、再び大火が起きた後、幕府は金森を別の藩に移し、飛騨藩とその山林を直轄領とした。徳川政権下では、飛騨商人は杉やケヤキなどの特定の高級木材の使用を禁止され、修理や新築の際にはできるだけ木材を再利用することが求められた。

高山の屋根の高さは平均して約4メートルで、他の町家に比べて低い。多くの町家には、自然光を取り入れるための屋根窓が設けられており、ろうそくなどの火を使わずに済む。また、建物の側面には窓がなく、隣の家とは隣接している。